

## D-7 児童の生活構造の時代的変遷に関する研究

才6報、過疎地における幼児・児童の教育・福祉・保健に対する提言と今後の課題 (その1) 提言  
大妻女大家政学部の羽喜代子、平井謙、菊川好、並木憲一、馬場吉三、長坂陽雄、犬場鉄人、倉巻和子、松本清風、針筒子

昭和47年の才1報に始まって、幼児・児童の生活構造に関する過密地および過疎地における実態調査の比較検討の結果を、本学会に5年にわたって報告してきた。5年の経過からは時代的変遷も十分に把握していきなりが、今日は、これまでの結果を整理して、とくに過疎地域の対象地である東北地方における2箇村の教育・福祉・保健の行政担当者および協力してくださった母親たちにフィードバックし、地方行政および地域住民が自分たちの課題としてどのように受けとめていくか—ということについて報告する。

方法：T村およびM村の2村に調査者が出向き、幼児・児童の教育・福祉・保健の行政および指導の担当者が一堂に会する機会を設け、その場において、以下のように整理のできた7つの項目について提言し、その提言を中心に意見の交換を行った。協力した母親たちに対し、これは講演会の形式で結果を報告した。

提言の内容：提言した7つの項目は以下の通りである。これらの項目は、いかなるもこれまでの報告から、家庭指導および教育施設において今後進めていきたいと希望する内容と取りあげた。

(1) 家庭の団樂の復活をはかること、(2) 育児・教育に対する両親の熱意を向上させること、(3) 自運動量の増加をはかること、(4) 栄養状態の改善をはかること、(5) 虫歯予防を徹底すること、および、一部に寄生虫感染対策を必要とする部落があること、(6) 保育所における保育内容の改善をはかること(地域性をとり入れること)、(7) 小学校教育における教科内容に地域性をとり入れること。